

## 農業と介護の両立における現状と課題

○石山睦美（宇都宮大・院） 赤塚朋子（宇都宮大）

【目的】農家にとっては、介護が必要になった際に、育児・介護休業制度のように家族の誰かが介護に専念できるような環境の整備が遅れている。そのため農業を営みながらの介護において、身体的にも精神的にも負担のない、そして経済的にも安定した生活を送ることができるためには何が必要なのであろうか。本研究では、農業の盛んな栃木県湯津上村を事例として取り上げ、同村における農業と介護の両立の問題と今後の課題を明らかにすることを目的とする。

【方法】農業の現状を把握するために「国勢調査報告」「農業センサス」「栃木県統計年鑑」を用い統計的に分析を行なう。また、湯津上村とその周辺での市町の行政、社会福祉協議会、改良普及員へのヒアリングを通して、介護に関する福祉サービスの実態を把握する。更に、同村内の被介護者とその家族を対象にヒアリングを行ない考察する。

【結果】湯津上村の特徴としては、総世帯数に占める総農家数の割合が高いこと、多世代同居の世帯が多いこと、高齢化が進行していることが挙げられる。ヒアリングの結果から①地域のつながりが強く、農村特有の社会習慣が残っている。②介護は家事の延長線上と考えられている傾向にある。③介護者も被介護者も在宅での介護を希望している。その背景には農業は個人経営であるため、日常生活の大部分を自宅やその周辺で過ごすことが多いこともある。しかし農繁期における介護が困難になるという現実がある。これに対しては農繁期を中心とした介護との両立を図る体制が望まれる。そのための課題と改良普及員の果たすべき役割を提起したい。